出来事ファイル　(No.21－2)

■六甲山間伐材活用ベンチ登場

元町6丁目商店街では、国土交通省が新型コロナ感染防止策として飲食店などの店頭道路使用基準を緩和したことをうけベンチ8台を製作、昨年9月から同商店街に設置した。ベンチの設置を企画したのは、元町6丁目商店街副理事長の片山喜市郎さん。六甲山の間伐材を活用し、製作はオーダーメード家具を製作する永田良介商店に依頼、昨年の9月から6丁目商店街にお目見えした。同ベンチには、手彫りで港をメージする「イカリ」のロゴも。

■もとづきんちゃんとクリスマス

元町商店街では昨年の12月20日(日)13時～17時まで、クリスマスの日を楽しんでもらおうともとづきんちゃんが登場、1～6丁目間を行き来しながら子供さん連れの来街者を楽しませた。もとずきんちゃんから元町商店街のクリスマスプレゼントを贈られ、もとずきんちゃんと一緒にハイポーズ！。密を避けるため、例年のような賑いはみられなかったものの、コロナウイルスであわただしい年の暮れのひと時を楽しむ親子の姿が各丁の商店街でみられた。

■D51のクリスマス

一昨年10月13日(日)、はじめて開いた「神戸西元町D51まつり」は、報道各社でも広く取り上げられ、多くの親子連れのみなさんが集まった。当日は、D51仲間を中心にD51関係者も出演、親子づれ向きのささやかな店舗も出店、小さな公園の屋台は賑わった。昨年暮れには、飯野浩三さんが代表をつとめる同会が、D51の頭部に紅白のサンタクロース衣装を着せて賑いを演出、道行く人たちが立ち止まって、手入れされたD51のほほえましい容姿をカメラにおさめる姿が見られ、いまや西元町の名物スポットに。

□読者プレゼント

特別企画展「絵そらごとの楽しみ」江戸時代の絵画から

活気あふれる都市やのどかな農村風景、働く人々や遊びに戯れるこどもたち。四季を彩る花と鳥。さまざまな景色や人、いきものが描かれる江戸絵画には現実と異なるイメージ重ねられたり、当時の人々にとって理想的な姿が投影されたりしたと言われます。絵の中に隠された当時の「絵そらごと」を読み解くことで、これらの作品をより深く楽しむことができる展覧会です。

会場:兵庫県立歴史博物館
℡079－288－9011
期間:1月30日(土)～
3月21日(日)

狩野派《四季花鳥図屏風》(左隻)
兵庫県立歴史博物館蔵

神戸元町商店街 楽市楽座情報 2月

◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料)　℡361－4523
予約受付中
2月11日(木)～2月16日(火) 予定あり

◇元町映画館(有料)　℡366－2636
2月6日(土)～2月12日(金)
『夏、至るころ』・『殺意の道程』
2月6日(土)～2月19日(金)『私たちの青春、台湾』
2月13日(土)～2月19日(金)『ヒッチャー 』
2月13日(土)～2月26日(金)
『友達やめた。』・「ジャン=ポール・ベルモンド傑作選」
2月20日(土)～2月26日(金)
『ルクス・エテルナ 永遠の光』・『クラッシュ』
2月20日(土)～3月　5日(金)
『音響ハウス Melody-Go-Round』
2月27日(土)～3月5日(金)
『ひとくず』・『いつか、どこかで』

2月27日(土)～3月12日(金)
『チャンシルさんには福が多いね』
『セノーテ』
【＊緊急事態宣言が出されましたので、予定は変更になる場合がございます。】

栄町通クリーン作戦

栄町通まちづくり委員会は、1月8日(金)10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、(元栄海三丁目自治会)奈良山喬一、(神戸市)西山昌樹・川口雄也、(広島銀行)曽我部真介、(兵庫県信用組合)三野健太郎・小林泰彦・井上博行・辻井純子、(三鈴マシナリー㈱)田中梨沙、(神明)高峰柴苑、(神明倉庫㈱)藤尾憲弘・米沢彩香、(㈱イーエスプランニング)磯部勇太・今福貴大・蓬莱眞子、(佐野運輸㈱)北島幸宏・宮脇英美、(大一産業)安田剛、(まちづくり会館)木原正剛、(新光明飾㈱)篠原博明・西村友博・(佐田野不動産㈱)佐田野宏之以上、22名のみなさんでした。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。

編集後記

「みなと元町タウン協議会」の発足は平成3年3月。北野や旧居留地、南京町などでは、すでにまちづくり組織が組織され、神戸を語る顔として活動がはじまっていた。先輩につづいて産声をあげたものの、保存の対象となる建造物は旧金融街に残る一部の建物に限られる。しかし阪神大震災が、ほとんどを破壊した。まち再興の旗印に掲げたのは、地域の中心部で開業目前の地下鉄海岸線で予定されている「栄町駅」を、まちのイメージを代弁する「みなと元町駅」に変えること。神戸市への粘り強い交渉で住民投票に導き決定した。"海のあるもとまち"は、憧れの住宅地として、倒壊した金融機関の跡地には、交通網の良さもあってマンション建設の波が押し寄せる。いま神戸市の人口が減少するなか、神戸発祥の地「元栄海」地区は、市内でも珍しい人口増加地域になっている。

みなと元町 タウンニュース TOWN NEWS No. 342

発　行:みなと元町タウン協議会　住　所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内　発行人:奈良山喬一　編集人:岩田照彦　電話・FAX:078－391－0831

JR神戸駅からハーバーロードの三角形の未来を描く時機が来た

合資会社ゼンクリエイト　根津　昌彦

緊急事態宣言が再び、京阪神都市圏にも発出された。このニュースが発行されたときには、2月7日以降の期間延長となっている可能性もあるが、元町商店街あるいはタウン協エリア内の各店舗・ホテルが、ステイホーム、都市間の移動自粛をお願いされている状況下にありながら、なんとか営業を続けて神戸市民の生活を支えて下さっていることに心より敬意を表し、感謝申し上げたい。そして、この厳しい経営局面を何とか持ちこたえていただきたいと切に願っている。

前回の寄稿(2020年12月号)で紹介した、三宮から新たなウォーターフロント開発が進む新港突堤、ポートタワー、ハーバーランドを通り、神戸駅へと繋がる連節バスの運行についても、緊急事態宣言発出下にあって、いくつかの動きがあったのでご紹介したい。

まずは、昨年12月8日から、この連節バス路線名称やロゴ・シンボルマークを投票で決定するWebアンケートを実施した結果、あらかじめ提示された案から最多得票を獲得した「Port Loop(ポートループ)」が路線名称に決定した(ロゴは下図の通り)。

Port Loop

一方、1月23日・24日、30日・31日のプレ運行は延期となった。今後の実施日は未定としながらも、4月からの運行開始に向けて、シンボルマークを加えた車両での試走は随時行なわれるとのことである。

そしてもう一つは、私の寄稿を受けて、みなと元町タウン協議会、神戸元町商店街連合会の昨年12月の各役員会でも連節バスが話題として取り上げられ、「元町」との結びつきを図られるように、神戸市と対話を行っていくことが確認された。早速、昨年末にコンサルタントとして神戸市公共交通課と意見交換をしたところ、目下4月の運行開始に向けて各種調整に注力されているが、JR神戸駅前への乗り入れも予定されている中で、ハーバーロードや栄町通などを通るルートも含めて、どのルートが通行上の支障なく公共交通機関の結節を図る上でベターであるかを、今後関係者とも協議の上検討していきたいという考えを伺うことができた。ポートループについては今後も協議を重ねていきたいと思う。

さて、本稿のタイトルに、「JR神戸駅からハーバーロードの三角形」という言葉を用いたが、この三角形のエリア内で、近年さまざまな動きが起こってきている(図1参照)。

最近のD51をご覧になられたであろうか？一昨年のD51まつり開催を機に、『神戸・西元町のデゴイチを守る会』のボランティア活動のおかげで、見違えるような輝きを取り戻している。年末年始は、クリスマスや新春のデコレーションも施され、注目のスポットへと変わった。この向かいの高架下では、新たなテナントも入って夜も灯りがともるようになり、まちの変化を体感できる場所となった。

また、住宅展示場として長年活用されていた場所の一部が、昨年12月に地上12階建の複合施設「神戸駅前JUSTスクエア」として竣工した。この建物の1～4階には、現在ポートアイランドに本社・放送局を置くサンテレビジョンが社屋を移転させる。5月中旬まで放送設備関連の工事を実施の上、新社屋での放送開始は6月中旬からの予定である。5～12階には、神戸初進出となるホテル聚楽が、256室のビジネスホテルとして4月3日に開業する。住宅展示場という週末の家族連れのみの来街であった場所に、サンテレビとビジネスホテルができることで、平日休日を問わず年中多くの人が訪れる場所へと変貌を遂げることとなり、まちの活性化にも大いに寄与してくれるものと確信する。

加えて、行政として神戸市では、「リノベーション神戸」という、まちの顔である「駅前空間」の魅力創造への取り組みとして、JR神戸駅の駅前広場の再整備の検討に着手し、昨年10～11月に行ったWEBによる市民アンケート調査結果をこの程公表した(https://www.city.kobe.lg.jp/a36648/shise/kekaku/kensetsukyoku/ekimae_miryoku/kobe-result.html)。「神戸駅で充実すればいいなと思う機能・環境は？」という問いに対しては、「街への動線の分かりやすさ」という選択肢が上位3位までに入っていることから、タウン協エリアへの誘客について、駅前広場再整備の中で何らかの策が講じられることになるのではないだろうか。さらには、弁天町交差点にかかる歩行者デッキを神戸ハーバーランドumieの建物東側2階部分まで延伸する計画も進められており、周辺の商業集積との連携が強められることとなる。

このほか「JR神戸駅からハーバーロードの三角形」部分では、近年分譲マンションも多数供給されるなど、土地利用転換が大きく進行している。元町商店街の西の玄関口との接点となるハーバーロード以西のこの三角形部分に対して、タウン協としてもなんらかのまちづくりの取り組みが必要であろうと認識し、これまでエリア内の企業の皆様とクリーン作戦を展開してきた。もう一歩踏み込んで、三角形エリアのまちの将来像を描き、能動的にまちの変化を求めていくとすれば、連節バスの運行開始というこのタイミングがいい時機ではないだろうか。

JR神戸駅からハーバーロードの三角形エリアのまちの動き

図1 求心性が高まるJR神戸駅からハーバーロードの三角形エリア

海という名の本屋が消えた（87）

平野義昌

諏訪山界隈（5）

洋画家・小磯良平（1903～88年）が32歳の時、養母の思い出を書いている。補註1

〈今から六十余年前神戸諏訪山の麓にアメリカ人宣教師が寺子屋をやっていた。そこに母が通っていた頃の話を聞くと面白い。丁度映画「若草物語」時代の服装を思い出せばいい。肩や腰に一ぱい襞のある洋服、黒と赤の虎マダラの靴下、編みあげ靴。それに教科書は宣教師の貸してくれる英語の地理や聖書であった、そして今でも唄って聞かせてくれる可笑しな英語の唱歌。これが後の神戸女学院であって母は第1回卒業生であるわけだ。〉註1

諏訪山の歴史に「神戸女学院」を欠くことはできない。本稿33号で旧三田藩主従と女学校設立経緯について取り上げた。以下要約。

(1)藩主・九鬼隆義（1837～91年）は白洲退蔵（1829～91年）や小寺泰次郎（たいじろう、1836～1904年）らを登用。財政再建、洋学奨励、藩校・郷学充実。明治維新後、神戸で藩士らと共に商社「志摩三商会」設立。

(2)九鬼はキリスト教を保護、支援し、藩士に信仰を勧める。宣教師に子女教育を依頼。

(3)1873（明治6）年、旧藩士・前田泰一が市場町（元町通5丁目）で英語・聖書の講義所を開く。讃美歌集（本邦初の翻訳詩）出版。

(4)同年、花隈（前田宅）で女性宣教師J・ダッドレー、E・タルカットが塾を開く。翌年、白洲別邸（北長狭通）に移る。

(5)75（明治8）年、塾は山本通に移り、「女学校」（英語名The Girls'School）として開校。アメリカ本国の援助、旧三田藩主従や市民から多額の寄付。

神戸女学院の史料を見る。

〈諏訪山の麓なる白洲退蔵氏の地所を購い学生三十人を入るる程の一棟の建築を計画す。（中略）白洲氏は曾て支那訓聖書を読み基督教を知っていたので、両女史の義挙に感じて居宅に接する所有地を割いたのであった。〉註2

土地は梅林、2千700余円。校舎はバルコニー付きの木造2階建て、建設費3千300余円。当時外国人は土地を所有できなかったので、旧藩士・鈴木清名義で買い受けた。鈴木の妻は(4)の花隈塾で学んだ。

〈明治八年十月十二日小学校程度の男女児の学校として開校の運となった。神戸英和学校の名の下に。〉註2

女学院史料では、寄宿生5名（三田の女性4人の名がある）、通学生10数名、九鬼、白洲、小寺ら旧藩の男女児他、元町の赤壁薬店と市田写真館の娘。寄宿生の食事代は月2円50銭、月謝共4円で足りた、とある。学校の仕事を手伝って補助を受けながら勉強した生徒もいた。科目は英語、算術、地理、唱歌、歴史、国語、万国史。補註2

〈……多くの労苦をもって設立されたこの学校は、学校に行ったことのない人でも入学できる、いうなれば小学校のような位置づけでした。〉註3

女学院史料でわかったこと。(4)の塾生徒は8～30歳、男女半々、既婚者が5人、九鬼夫人も聴講した。(5)の「女学校」には男児も在学した。アメリカ本国からの献金5千2百円、日本人の寄付800円である。註2

「女学校」は初等教育から中等・高等教育へと学科・組織を整えていく。79（明治12）年、「英和女学校」（英語名変わらず）に改称。83（明治16）年、予備科2年、普通科4年とする。85（明治18）年、第1回卒業式、12名（16歳から28歳）が巣立った。94（明治27）年、「神戸女学院」(Kobe College）となった。通称「女学院」の始まりである。1933（昭和8）年、西宮（現在地）に移る（跡地に私立神港中学＝現神港学園高等学校が移転）。

商社「志摩三商会」は本業の他、不動産事業で繁栄し、九鬼ら社員は個人としても土地を所有した。1913（大正2）年4月現在の地租納入金額、小寺家1万5千余円、九鬼家1万2千余円。「すこしオーバーに表現すれば、旧三田藩が神戸を占領してしまった」。註5

76（明治9）年、小寺泰次郎は中山手通に宏大な屋敷「蘇鉄園」を構えた。現在の「相楽園」（1941・昭和16年神戸市所有、小寺家の厩舎保存）である。80（明治13）年から1902（明治35）年まで、泰次郎は兵庫県会議員・神戸区会議員を歴任。道路新設、拡張など都市計画を推進した。林野開拓や溜池埋め立てによって土地を造成し、民間に貸して収益をあげ、新たに土地を買い入れ、そこに学校を建設した。後年の市主導プロジェクト「株式会社神戸市」原型である。

泰次郎の成功は公私混同・利益誘導、と誤解されるかもしれないが、評伝執筆者は泰次郎の「謹厳実直」「質素」を評価する。藩主に見込まれ財政再建を担った人物ゆえ、倫理観が高く、家族にも徹底した。道路建設では自分の土地を寄付した。常に収入の1／10を寄付し、災害支援には皇室御下賜金の1／200を基準に寄付をしている。遺言には多くの学校に万単位の寄付を命じている。註4

白洲退蔵は九鬼家の家宰を勤めながら、1880（明治13）年に県会議員、82（明治15）年横浜正金銀行重役、頭取を経て、大蔵御用掛など歴任。90（明治23）年官職を辞して、九鬼家の仕事に専念する。註4

1897（明治30）年頃、神戸女学院東隣に川崎造船所社長・松方幸次郎が屋敷を構えた。新婚の妻は九鬼家の次女・好子、英和女学校ＯＧである。土地の旧所有者は長州出身の実業家だが、周辺は九鬼家と白洲家の所有地だった。松方邸敷地は約3千坪、門から屋敷まで坂道が約150メートル続いていた。巨大な黒い門を九鬼家から移築した。近隣の老人たちが寺社と間違えて、門前に正座、経を唱え、青銅製の鉢のような装飾に賽銭を投げ込んだ、というエピソードが残る。註6

1913（大正2）年、小寺邸襲撃事件が起きた。泰次郎長男・謙吉（1877～1949年、名付け親は白洲）の時代になっている。12（明治45）年12月、西園寺公望内閣は軍拡に反対したが、軍の要求に耐えられず総辞職。同年（大正元）年同月、明治から大正への代替わり、国民は新しい政治に期待した。「大正デモクラシー」の芽生えだ。次の桂太郎内閣は軍と藩閥をバックに増税・軍拡路線。尾崎行雄・犬養毅らは「閥族打破・憲政擁護」をスローガンに倒閣運動を展開。ところが、憲政擁護派の謙吉が桂につき、議会内で同僚議員に殴られる事件が起きた。桂が議会を停止すると数万の群衆が国会を包囲し、新聞社・警察を襲撃。内閣は総辞職。神戸市民は謙吉を「変節漢」と攻撃。富豪に対するやっかみもあった。

〈二月十三日夜、市民は続々と湊川公園に集まった。誰が吹いたのか突然ラッパが勇ましく鳴りひびいた。数人の男がかわるがわるに木箱の即席演壇に立ち上がって悲憤慷慨の熱弁を振った。拍手がつづき、熱狂した聴衆は、小寺邸を打ちこわせ、と叫んだ。群衆は列をなして小寺邸に向かった。〉註7

群衆は湊川神社で5千名に達した。小寺邸の門を壊し、邸内を荒した。別の集団は新聞社や他の議員宅を襲撃。14日、警察は厳しく検挙したが、人は増えるばかりで、姫路から軍隊が出動。15日も騒乱は続いたが、さらに軍隊増員によって鎮圧。逮捕者は300人。後日談がある。謙吉は逮捕者たちに差し入れをし、家族にも援助をした。ある男は釈放後、謙吉に直接謝罪し、選挙のたびに謙吉を護衛、演説までした。註7

邸宅売却も謙吉時代のことだ。弟・壮吉は満洲で大豆事業に成功したが、第一次世界大戦後の不況とロシア革命の影響で破綻。1929（昭和4）年、再起を図りながら急死する。大きな借金が残り、謙吉は邸宅を処分した。銀行から「三田中学」（後述）の資産売却を迫られたが、父子二代の理想を守った。

謙吉は泰次郎の教えを受け継ぎ、1911（明治44）年に泰次郎の遺志である学校、三田中学（現三田学園中学校・高等学校）を創立。関東大震災後には、東京の主要大学に蔵書を寄贈。特に早稲田大学に1946（昭和21）年まで毎年洋書を送り続け、「小寺文庫」として3万数千冊収蔵されている。1930（昭和5）年、政界から引退した。47（昭和22）年、初の公選で神戸市長に当選するも、49（昭和24）年任期途中に急逝。伝えられる謙吉の人格から見て、大正の政治行動は謎である。

写真　『神戸市街全図』大阪和樂路屋　1919（大正8）年より。諏訪山の下に「女学院」と「松方邸」が並ぶ。その左下に「小寺氏邸」。

註1　『小磯良平画文集　絵になる姿』　求龍堂　2006年
註2　『神戸女學院史』発行兼編輯人神戸女學院五拾年祝賀會　1925年　（原文は旧字旧仮名）
註3　津上智実編『山本通時代の神戸女学院　黎明期の女子教育とその歩み』　日本キリスト教団出版局　2015年
註4　北康利『北摂　三田の歴史』六甲タイムス社　2000年
註5　赤松啓介『神戸財界開拓者伝』太陽出版　1980年
註6　神戸新聞社編『火輪の海――松方幸次郎とその時代――上』神戸新聞総合出版センター　1989年
註7　落合重信・有井基『神戸史話　近代化うら話』　創元社　1967年
註8　「小寺謙吉BIGLOBE」　http://www5a.biglobe.ne.jp/~yama-bu-/kodera.htm

補註1　良平の実家は旧三田藩・岸上家。22歳の時小磯家の養子に入る。養母は小寺泰次郎の娘・秀子。

補註2　資料により学生数に違いがあり、本稿33号では寄宿生10人、通学生24人と書いた。前掲註3の本では、開校時の寄宿生3人・通学23人、翌年夏の時点で生徒34人、秋40人とある。

補註3　寄付金も若干違いあり。註3の本では4700ドルと800ドル。為替レートは明治7年で1ドル＝0.984円だから大きな違いではない。

乙仲通界隈の魅力と可能性　乙仲さんぽ活動報告 7

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部 兵庫地域会
乙仲通界隈デザインワークショップ実行委員会

共用空間のあり方

私たち、日本建築家協会（JIA）近畿支部兵庫地域会が 2015 年から 3 年間に渡って取り組んできた関西の大学生有志と行った乙仲通界隈デザインワークショップ「乙仲さんぽ」の記録について連載させていただいておりますが、7 回目である今回は「共用空間のあり方」についてご紹介させていただきます。

2015 年の初回のワークショップにおいてまずは乙仲通界隈の魅力と課題をリサーチしようということで現地を散歩して、気になるところの写真を撮り、ポストイットにその内容を書き込みひと目で分かるようにして、似通った内容ごとにまとめていく作業を行いました。（写真 1）そこで魅力と改題を大きく 5 つのテーマに絞り込むことができました。その一つがこの「共用空間のあり方」です。昭和を感じさせるレトロビル、道路にまではみ出したおしゃれなＡ型看板、迷宮のような建物の中の個性的な店舗などの魅力的な街並みにあって、どうしても気になってしまう課題の一つとしてとりあげることになりました。乙仲通界隈には阪神大震災の影響で取り壊されたであろう空地の部分にコインパーキングや月極駐車場が多くあるにも関わらず、公園などの共用スペースがなく、コンビニの前くらいしか休憩できる場所がないということに街歩きをしているとき感じている人が多くいました。当然、買い物に来た人やこの界隈で働く人が休憩しようとしてもそのような場所がない状況を改善し、いろいろな人が自由に使える共用空間を創出できないかという思いで再度街歩きを行いました。私たちが街の見方を少し変えると建物と建物の隙間や建物がセットバックした部分や平屋の建物の屋上などの気に留めることがなかった「すきま空間」がうまく使えるのではないかと感じることができました。そして、ワークショップに参加したメンバーがそれぞれ気になった「すきま空間」を利用した提案を作成して、2015 年の成果発表を行いました。

2016 年には前年のワークショップにも参加していた神戸松蔭女子学院大学の学生が地元の方々や建築家からのアドバイスを受けながら「すきま空間」を利用した様々な人が自由にできる共用空間の提案を行い、2017 年 2 月に乙仲通の 2 ヶ所において作品展示会を行い 3 月のワークショップにおいて優秀賞を受賞しています。（図 1）

2017 年には地域の声をより取り入れようということで、乙仲通界隈にある店舗にヒアリングを行いワークショップメンバー全体で情報を共有していきました。様々な意見を頂いた中で集客の観点での改善を希望する店舗が多くあり、トイレや休憩所、夜間照明などの不足などをハード面での問題を感じていることがわかりました。そこでこれまでのワークショップで見つけてきていた「すきま空間」に本棚や街灯、ベンチ、トイレやゴミ箱といった様々な「停留所」を設置して、この界隈を訪れた人々の休憩スペースや、乙仲通界隈の良い点でもある雑多感を感じられる空間を提案しています。（図 2）

乙仲らしい良いところをよりうまく引き立てるために、ここで「共有空間のあり方」というハードの部分において新しいものを創るという提案をするということは、周辺環境を整えれば今ある良いものを残しながら生かしてゆくという既存の街への投げかけとして重要なのではないかと思います。

写真 1

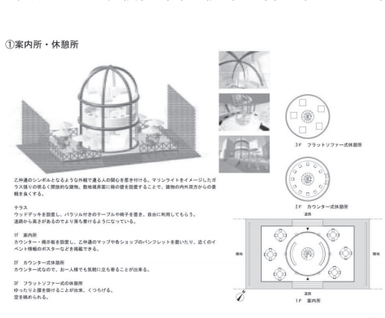

図 1

図 2

ワークショップを経て

私たちがこのワークショップをはじめてから 5 年が経ちます。その間に乙仲通界隈には大きなホテルやマンションなどが建設され、街並みも少しずつ変わってきています。2015 年のワークショップでみつけた「すきま空間」も現在調査すればもうなくなっているものもあるはずです。その時はこの「すきま空間」であればこんな提案をしたら色んな人に使ってもらえそうだなと大学生たちと一緒に考えていました。ただ仕事柄、乙仲通界隈に限らず街なかで新しい建築物が建って、楽しそうではない「すきま空間」ができあがっていたときに、それを楽しそうではないからだめとは言えない自分がいるのです。事業系の建築では利回りやレンタブル比が判断基準となるのが当然で、賃貸床面積の坪単価に反映されない部分にコストを掛けて何かを創るということは設計者が検討を重ねて提案したとしても、経済原理からすれば回収できないものにコストをかけるという無駄として捉えられることが多いのが現実です。でも、時々こちらの意図を理解していただき、お金を産まない部分にコストを掛けて、オーナー自身や使う人や地域の人が建物を愛おしいと思ってもらえる部分を創らせてもらえることがあります。今の乙仲らしさを作っているレトロなビルも建設当時のオーナーと設計者の間で同じようなやり取りがあったのではないでしょうか。自社ビルなので階段やトイレは最小限の寸法にして、執務スペースは容積いっぱいまで建ててくれという要望に対して、建築家がファサードは会社の顔なので他の建物にない特徴的なデザインにしようとか、良い材料を使って末長く使っていけるようにしようと愛おしくなる部分を提案したことにより、今でも現役で使えるおしゃれなレトロビルとなり、狭い階段とトイレと広い執務スペースは迷宮のような小さなテナントがたくさん入るビルになることができたのかも。当時のそんなやりとりがあったから乙仲通界隈には現在のような愛おしい街並みができているのではないでしょうか。当時の建築家が積極的に関わったから今のような街並みができたのであれば、今を生きる私たち建築家が関わることをやめてしまえば、そのような空間は今後、生まれてこなくなってしまう。そのために私たちは日々検討を重ねてクライアントと良いものを創る努力を忘れてはいけない。これがワークショップを経て感じたことです。

山﨑 康弘　（やまさき やすひろ）
有限会社シンプレックス一級建築士
事務所　取締役所長／一級建築士